

神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ
(8回連載、第1回)

ヴィルヘルム・ブッシュ兄弟について

ヴォルフガング・ビューネ

ヴィルヘルム・ブッシュ兄弟が一九六六年六月二十日夜にリユーベックの病院で急逝されたとのニュースは、マスコミ各社によって直ちにドイツ全土に報道され、多くの人々に衝撃を与えました。

ブッシュ兄弟とは、

どのような人だったのでしょうか。

彼は、死後に知名度が大きく上がった数少ない人物の一人です。生きている時にはドイツ語圏でしか知られていませんでしたが、今ではシベリア、南米、南アフリカに至るまでよく知られています。彼の著書は生前すでに数十万部を越えていましたが、没後、

さらに多くの言葉に翻訳されて各国に広まり、今や数百万部を越え、世界中で愛読されています。彼の著書「神と共に歩む人生」を読んだおかげで「私の人生は根底から変わった」と証言する人々が世界各国で増えています。

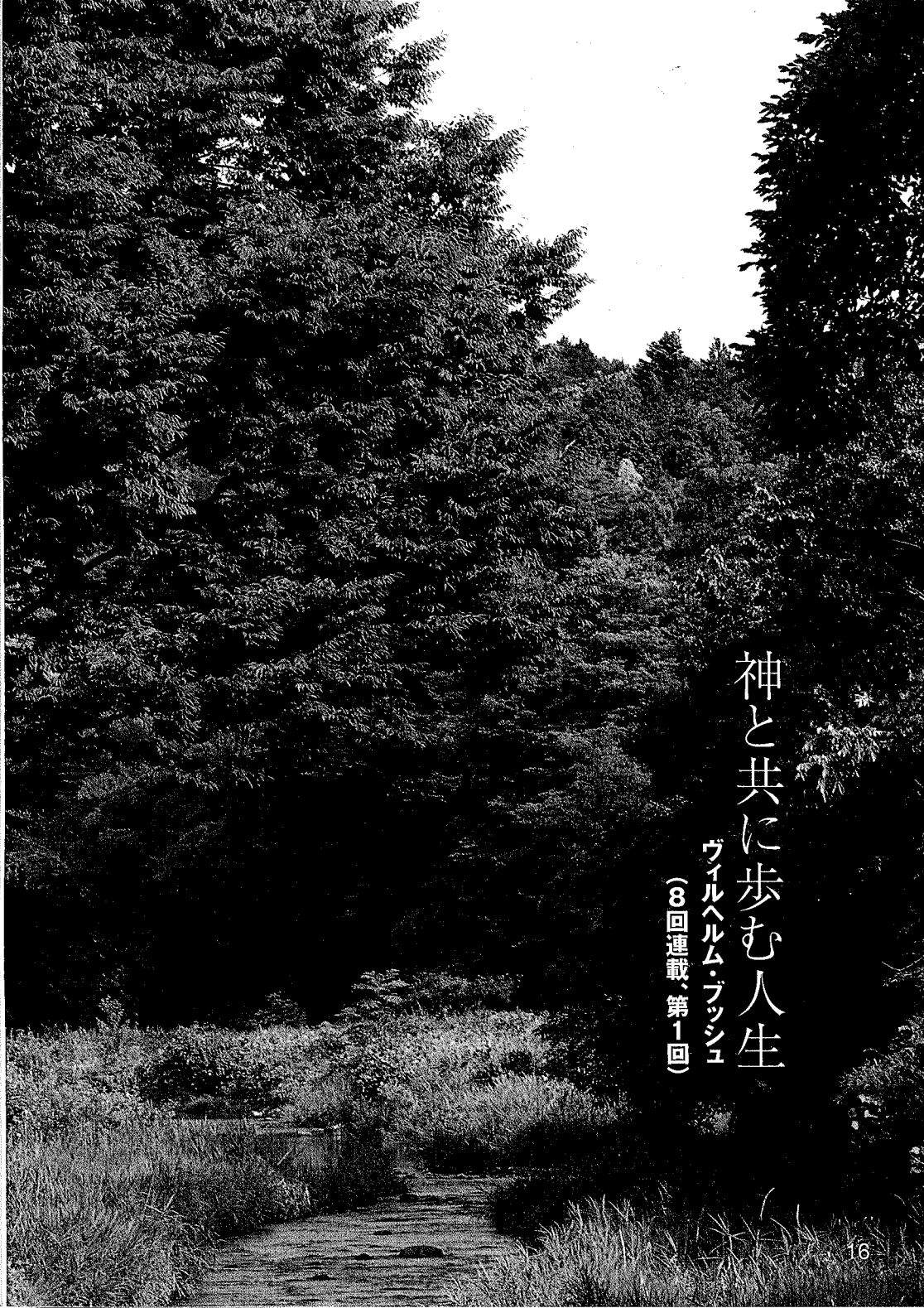
では、ブッシュ兄弟は

どのような経歴の持ち主だったのでしょうか。

彼は著名な牧師の子として生まれましたが、若い頃は神や信仰とは全く無縁でした。第一次世界大戦当時、彼は若い将校として戦争に参加しましたが、その頃は神に対して何の関心も抱いていませんでした。ましてや将来、自分が教会で神を宣べ伝えることになろうとは思っていませんでした。

彼が従軍して数ヵ月後、フランスのヴェルダンの戦いの停戦期間中に、ある事件に遭遇しました。彼

神と共に歩む人生



が戦友の一人と冗談を言いあっていた時、突然敵の砲弾が近くで炸裂し、その破片が戦友の心臓を引き裂いたのです。即死でした。

その時のことをブッシュ兄弟は次のように書いています。「その瞬間、巨大な眩しい光が私の頭上を照らしました。私は死んだ戦友が聖なる神の前に立たされているのだ、と直感しました。もし、私の座っていた位置が戦友と入れ替わっていたら、死ぬのは確実に私だったのです。そして神の前に立たされるのも間違いなくこの私だったのです。気がつくと、私は手を組んでひたすら神に祈っていました。神に祈ることなど久しく忘れていたのに。『神様、どうすれば私が永遠の地獄に行かなくてすむかを知るまで、私を生かし、敵弾から守ってください。お願いします』と。

数日後、私は壊れかけた農家の小屋の中で、新約聖書を手にしてひざまずいて、『主イエス様。聖書

にはあなたが罪人を赦し、聖めるために父なる神から遣わされ、十字架につかれた、と書いてあります。私は罪人です。性格も悪く、その性格は将来も変わる事ができるとはお約束できません。でも、私はこの戦争で敵弾に当たって何も分からないうちに地獄に行きたくないのです。とは言え、どうしたらいいか分からないので、私自身をあなた様に明け渡すことにします。ですから、私をお好きなように存分に取り扱ってください』と祈りました。その時は何の答えもなかったように思ったのですが、祈り終えて小屋から出た瞬間、『私は私の神、主を見出した』と確信しました」

それ以来ヴィルヘルム・ブッシュ兄弟は、聖書の神に対して生涯誠実であり続けました。彼はヴェルダンの戦いの後で主に仕える人になり、最初はビーレフェルトで、次いでエッセンで死ぬまで鉱山労働者に宣教し、多くの若者にイエス・キリストへの道

を宣べ伝えました。

一九六六年六月二十四日、私自身も大勢の人々とともに、涙を流しながらブッシュ兄弟の棺が埋葬される墓地まで歩きました。私たちの人生を決定的に変えてくれたのはこの牧師だったからです。

後にドイツ大統領となるグスタフ・ハイネマン氏は、追悼式の席上、ブッシュ兄弟の人となりをして、「彼が行くところ、いつでも、どこでも、何かが起こりました。彼の心の奥に息づいていたのは、何よりも神に対する信仰の深さ、そして主の使いとして何事にもめげない神への燃えるような忠誠心でした」と語りました。

半世紀以上たった今でも、彼のメッセージは時代遅れになってはいません。現代の社会で過去数十年間にもたらされた物質的な繁栄は、人間が生きていく真の意味と目的に対して何の解決も与えてはいません。ブッシュ兄弟が一生をかけて説き続けたよう

に、ただイエス・キリストだけが、人生の意味と目的に対する真実にして唯一の回答です。私はこのことを、この本を通してあなた自身で確かめていただきたいと、切に願っています。



神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ

第一章 なぜ「イエス・キリスト」なのか？

大きな都市で長い間牧師をしていると、よく次のようなことを聞かれます。「神はなぜ、この世にひどいことが起こるのを許されるのでしょうか」、また、「あなたのお話はいつもイエス・キリストのことばかりで、少しばかり狂信的に聞こえます。宗教は、どんな宗教でもよいのではないのでしょうか。肝心なのは、目に見えない高い所にある大きな存在を感じているかどうかではないでしょうか」など。私と同じフランクフルト出身のゲーテも、次のように言っています。「人間は、自分が感じたことがすべてであると考える存在だ」と。

今、この本を読み始めた方の中にも、次のように

有効期限が切れていますよ」と言われました。するとその大柄な男性は次のように言い返したのです。「小さいことにこだわるのはやめな。肝心なのはパスポートを持っていることだろ」。すると検査官はすぐ怒鳴り返しました。「肝心なのは、有効なパスポートを持っているかどうかだよ」

信仰についてもこれと同じことが言えるのではないのでしょうか。

「信じるものがあれば何でもいい」というのではなくて、「正しい信仰であるかどうか」が問題なのです。長い一生の間、厳しい試練の時にも常に支えとなり、希望を持って人生を生き抜くことができる、そのような真の信仰であるかどうか、また、その信仰によって平安のうちに死んでいくことができるかどうか、が重要なのです。その信仰が正しいかどうかは、死に直面した時に疑問の余地なく明らかになります。

神と共に歩む人生 ■ ■ ■

考える方が多いと思います。「宗教は否定しない。

しかし、信仰する対象はイエス・キリストでも、釈迦でも、アラールの神でも、孔子でも、または運命論でもないではないか。肝心なのは何かを信じていることであって、一つの神に限定することはない。それは各人の自由だ」と。

かつて、ある老婦人が私に言ったことがあります。「あなたはイエス・キリストのことばかり話されますが、キリスト自身が『わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。(ヨハネ 14・2)』と言われたではありませんか」と。恐らくこの方は、神様の家はいっぱいある。だから特にイエス・キリストでなくてもいいじゃないか、と言いたかったのでしょう。けれども彼女はイエス様の言葉を完全に誤解しています。

ベルリン空港の出入国検査所で、私の前にいた大柄な男性が検査官に呼び止められ、「パスポートの

天地を創造された神のひとり子である主イエス様を信じる信仰だけが、正しく生き、正しく死ぬことができる唯一の信仰です。イエス様ご自身が「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。(ヨハネ 14・2)」と言われた真意は、ヨハネ10章9節の聖句で語られています。つまり、「天の御国のイエス様のそばには、私たちの住まいがたくさん用意されている。そして、その家に入るためには、イエス様という門を通してでなければ到達できない」ということです。まことの神の住まい、永遠の天の御国に入る門は、ただ一つ、イエス様しかないのです。

わたしは門です。だれでも、わたしを通してはいくら、救われます。(ヨハネ 10・9)

イエス様は人が罪赦され、救われ、永遠のいのちに生きることができる、唯一の門です。しかし多くの

人々はそのことを聞きたがりません。人々は神について何時間でも議論しますが、そこで論じられるのは、その人だけの思い込みによる誤った神概念です。イエス様は、このような空しい議論の対象とはなり得ないお方です。私が言いたいのは、「神の御子であるイエス様を信じる信仰だけが、人を救うことができ、人を幸せにすることができる信仰だ」ということです。そのような信仰によってのみ、人は真のいのちに生きることができ、また、平安のうちに死ぬことができるのです。

しかし、この真理を説いてまわることが、私の周りの人々には異常な行為に見えることを、私はある体験によって知りました。何年前か、私はエッセンの街を歩いていました。道端には二人の男性が立っていました。彼らが鉱山労働者であることは明らかでしたが、そのうちの一人が「こんにちは」と私に挨拶してくれました。私は彼に近づき「どこかでお

会いしましたか？」と尋ねると、彼はもう一人の仲間仲間に笑顔でこう言ったのです。「この方が牧師のブッシュさんだよ。若いけれどしっかりした方だろう？」と。「これはどうも」と私が言ったところ、彼はこう続けました。「ところが残念なことに、この方は頭がおかしいんだ」。私は心外でしたので尋ねました。「一体、私の頭のどこがおかしいんですか」。すると彼はこう言ったのです。「この人は若くてしっかりしているように見えるけど、いつもイエス・キリストのことしか話さないんだ」

これを聞いて私は嬉しくなりました。「私は頭がおかしいではありません。あなたが百年後に永遠の世界に入っているかどうか心配なのです。あなたが永遠の天の御国に入れるかどうかは、ただ一つ、あなたがイエス様を知っているかどうかにかかっています。あなたが死後、天国にいるか地獄にいるかは、ただイエス様次第で決まります。そこで聞きた

いのですが、あなたはイエス様を知っていますか？」その男は笑いながら言いました。「ほらね。またいつもの話が始まったぞ」

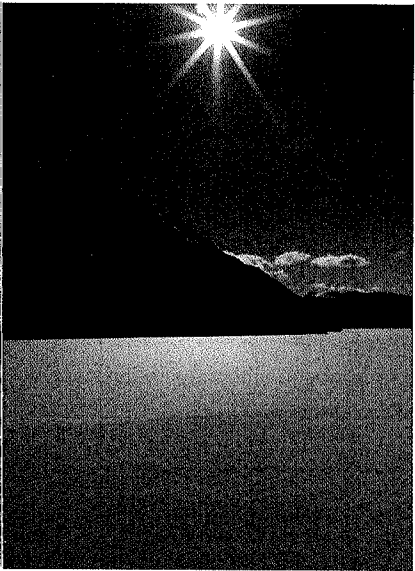
ではここで、その「いつもの話」をあなたにも語りたいのですが、まず聖書の言葉を一つ引用しましょう。

御子（イエス様）を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。

（1ヨハネ 5・12）

あなたはどこかでイエス様のことを聞いたことがあると思います。たとえばあなたがミッション系の学校の出身者なら、きっと聖書の時間があったことでしょう。でも、ただイエス様のことを聞いたことがある、というだけでは、「イエス様を持つ者」とは言えません。聖書にある「御子（イエス様）を持つ者」とは、「持っている者」です。「御子を持つ

者はいのちを持って」いるのです。それはこの地上の生涯にとどまらず、死後、永遠にそうなのです。続いて聖書は次のように言い切っています。「神の御子を持たない者はいのちを持っていません」と。ですから私は、あなた自身のためにお勧めしたいのです。どうか、ぜひイエス様を受け入れて、あなたの人生をイエス様に明け渡してください。なぜならイエス様なしの人生は、とても惨めなものだからです。次に、「なぜイエス様がすべてのすべてであり、また、イエス様を信じる信仰だけが、唯一正しいものであるか」ということを、私の体験を交えてお話ししたいと思います。



神の啓示であるイエス様

よく、「私だって神様の存在は認めます。しかし、どうしてイエス・キリストでなければならぬのですか?」というような質問を受けます。この答は明白です。天地万物を創造された神、全知全能の神は、あまりにも大きなお方なので、人間の知識や知恵によつては理解しえない存在です。このことをある人は次のように表現しました。「神はご自身を隠したまう」と。ですから、私たちが神に近づこうとすれば、神のひとり子であり、人間の姿をとつてこの地上に來られ、いのちを捨てて私たちの罪を贖つてくださったイエス様の導きなくしては無理なのです。

人間は過去、自分の小さな知識や欲望にあわせて、自分に都合のいい神々を勝手に作り上げてきました。この世にひしめいている、いわゆる宗教というものは、人間の欲望や願いを投影した虚しい幻想に過ぎ

ないのです。

しかし、イエス様こそは、まことの神を知る唯一の門であり、道です。イエス様を抜きにしては、まことの神を知ることは不可能です。イエス様は神の啓示そのものであり、父なる神はイエス様を通して私たちの前にその姿を現わしておられるのです。

このことをもっと分かりやすく、視覚的に説明しましょう。まず、非常に厚い霧の壁を想像してください。この霧の壁の向こう側に、まことの神が存在しています。人間は神なしに生きていくことができないと気がつく、その神を探して霧の壁の中に入り込んで行こうとします。これがこの世に多く見られる宗教活動です。これらの宗教は、それぞれが独自の神を空想で描いています。そしてこれらの宗教に共通している点は、霧の中で迷い、自分たちが描いた幻想を神だと思い込み、しかもそれを霧の中で再び見失っていることです。このようなやり方では、

まことの神、唯一絶対の神にたどり着くことはできないのです。

神は「ご自身を隠したもう神」です。イザヤという人はこのことを啓示によって知らせられ、「主よ。私たちはあなたのところには行けません。この霧の壁を裂いて私たちのところに来てくださらなければ」と叫びました。神はまさしくこの叫びをお聞きになりました。イエス様というひとり子をこの地上に遣わすことによつて、霧の壁を裂いて私たちのところに来てくださったのです。

イエス様がこの地上にお生まれになった時、御使いはベツレヘムの野原でこう叫びました。

きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。

(ルカ 2・11)

いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。

(ルカ 2・14)

神が私たちのところに來られたのです。イエス様はおっしゃいました。

わたしを見たものは、父を見たのです。

(ヨハネ 14・9)

イエス様なしに、神について知ることは決してできません。神についての確信を得ることができるのは、ただイエス様を通してだけです。では、なぜイエス様が必要なのでしょう?次に、その理由を説明しましょう。

イエス様は、 私たちを救うための神の愛

以前、あるジャーナリストのインタビューを受けた時、「あなたはなぜイエス・キリストについての講演をして回るのですか？」と尋ねられて、私はこう答えました。「私は、人々が永遠の地獄に行くのではないかと恐れているからです」。彼は笑いながら言いました。「そんなことはあり得ない」。そこで私は言いました。「百年経ったら、あなたが正しいか、それとも神の言葉が正しいか、分かる時が来ます。あなたは神を恐れますか？」すると彼は答えました。「神を恐れたことはありません。だって、神は私たちが恐れるような存在ではないでしょう？」そこで私は続けて、「あなたが神についてほんの少しでも知っておられるなら、神は聖であり義であり、私たちの罪を裁かれる力を持っておられるお方

だと分かっているはずです。裁き主である神ほど恐ろしい方はありません。あなたは『神は優しい方だ』と思っておられるようですが、それは神の一面に過ぎません。聖書は多くのところで、『生ける神の御前に出ることは恐ろしいことはない』と言っています」と説明しました。

あなたは今までに神を恐れたことがありますか？もしなければ、あなたには聖なる神と、あなたの罪深い人生についての恐るべき真実が全く見えていないのです。神を恐れ始めると次のような疑問が生じるはずです。「私は神の御前にどのようにして立つことができようか？」と。神の御怒りを恐れなくなっことは、現代に生きる人間の最も愚かな過ちです。罪に対するまことの神の御怒りを、もはや真剣に受け止めようとしなくなったことは、今の世の恐るべき愚かさのしるしなのです。

私たち人間は神の前に多くの罪を犯しています。

このことは否定できない事実です。そしてもし、その犯した罪を帳消しにするために神の御前に何かを差し出さなければならぬとすれば、いったい何によつてその大きな罪を贖うことができるでしょうか？また、神が厳格にその罪の償いを私たちに要求なさるとしたら、それはきわめて厳しいものとならざるを得ないでしょう。まして、もし神が御怒りだけをもつて私たちに向かわれるとすれば、それは、真に恐るべきことになるでしょう。私たちは、もともとつと神を恐れなければならない存在であり、本来は、神の御前に立つことなどできないものなのです。

しかし神は恐ろしく、厳しだけのお方ではありません。私たちを心から愛してくださるお方でもあります。神は、ご自分のひとり子を十字架につけることによつて、私たちの罪をすべて聖め、罪の赦しを成し遂げてくださいました。これこそが私たちに對する神の愛の表れです。「人間の罪に対する神の

御怒りからの解放はどこにあるのだろうか？救いは一体どこにあるのだろうか？」といった疑問に對する疑う余地のない神の回答が、イエス様の十字架のみわざです。「私はあなたがた人間を愛するがゆえに、わたしのひとり子イエス・キリストを十字架につけて罪を贖った」。これこそが、神の愛です。私たちはいつも、「私たちを救う神の愛とは、イエス様ご自身である」という事実を心に刻むべきです。それゆえ、神は次のように望んでおられます。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。
(一テモテ 2・4)

しかし義なる神は、「不義である」ことがおできないならないお方であり、罪に對して黙っていることがおできになりません。ですから人類の救いのため、贖いのために、御子を与えてくださったのです。

さて、ここで私と一緒に約二千年前のエルサレムに行ってみることにしましょう。そこには丘があり、何千人もの人々が集まっています。そしてその群衆の中心には、三つの十字架が立っています。左の十字架上の男は、私たちと同じ罪人です。右側の男も同じです。しかし、いばらの冠をつけて真ん中にいる人こそは、生ける神の御子イエス・キリストです。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることできないとは考えなくて、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもつて現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

(ピリピ 2:6-8)

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通

され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

(イザヤ 53:5)

イエス様は世の罪を負って十字架につき、いのちをお捨てになりました。それは、人間の罪を赦し、神との和解のために捧げられた神の小羊です。この貴い犠牲であるイエス様のご愛にあなたが気づかずにいる限り、あなたは神の救いの外にあり、依然として神の怒りの下に置かれています。たとえあなたがそのことに気づかなくても、また、たとえあなたがそれを否定しても、その事実は変わらないのです。ただイエス様のもとに来る者だけが、真の救いに入られ、神の平和のうちにあります。

私の体験談を一つお話ししましょう。第一次世界大戦当時、私は砲兵で、その武器は防盾（敵の弾丸を防ぐ盾）のついた大砲でした。ある時、私たちは、

前方に歩兵部隊がいない状態で前線に立たされ、そこに相手の軍隊が攻撃を仕掛けてきたのです。敵の集中砲火が私たちの大砲に向かって雹のように降り注ぎました。しかし、防盾は堅固で、私たちはその後ろで守られました。もし、ちょっとした防盾の外に手を出したら、その手は即座に銃弾で穴だらけにされていたことでしょう。しかし、私たちは防盾によって安全に守られたのです。

まさしくイエス様は、私にとっての「防盾」なのです。私はイエス様なしには神の裁きの前で滅びてしまうことでしょう。イエス様なしに私が何かをしても、心には全く平安がないことでしょう。イエス様なしには、恐れずに死ぬことはできないでしょう。私たちは、イエス様なしには永遠の滅びに向かうことになるのです。永遠の滅びほど恐るべき状態はありません。そしてそれは実際にあるのです。けれども私たちは、イエス様の十字架の背後に立つ時、ちょ

うど防盾の後ろにいるのと同じように、すべてから守られるのです。人生の戦いともいうべき過酷な体験を通して、私たちはイエス様こそが救い主であり、贖い主であるということを事実として知ることができるようになります。イエス様は私たちを救うための神の愛です。神はすべての人が救われることを望んでおられます。だからこそ、私たちの救いと贖いのために、そのひとり子をお与えになったのです。それはまさに、「あなた」のために神がなされたことなのです。さて次に、私たちは何のためにイエス様を必要とするのでしょうか。



イエス様は「私たちの人生の最大の問題」を解決できる唯一の方

「私たちの人生最大の問題」が一体何であるか、あなたはご存知ですか？もしあなたが老人なら、日々老化が進んでいく内臓の状態が最大の問題だと考えることでしょう。あなたが若者なら、異性に対する愛情が最大の問題だと考えるでしょう。人は誰でも自分自身の問題を抱えています。しかし「私たちの人生で最大の問題」とは、「神に対する私たちの債務」なのです。

私は青年の頃から牧師をしています、若者たちに福音を伝えるために、いつも分かりやすいたとえ話を考えていました。その一つは次のようなものです。「あなたの首に、生まれた時から鉄の鎖が取り付けられていると想像してみてください。そしてあなたが罪を犯すたびに、その鎖に新しい環が一つずつ増

えていくのです。汚れた思いを抱くたびに鉄の環が一つ。母に反抗するたびに一つ。人の悪口を言うたびにまた一つ。神を忘れて祈らない一日を送るたびに一つ。不誠実な嘘のたびに一つ、と増えていくのです」

考えてみてください。私たちに取り付けられた鉄の環が一体どれほど長く繋がっていくかを。これが私たちの神への債務、罪の鎖なのです。私たちの神への債務は目には見えませんが、神から見ればこのように明白なものです。神の御前で、私たちはこのとてつもなく長い鎖をひきずって生きているのです。

人はこの神への債務の鎖を引きずったままでは、決して幸せになることはできません。しかし、この神への債務の鎖を断ち切ることは、牧師にも、祭司にもできません。それでは、人はこの神への債務という重くて長い鎖をひきずったままで、一生を過ごさなければならぬのでしょうか？

聖書は言っています。

人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。
(ガラテヤ 6・7)

しかしながら、私たちには「神への債務」という人生最大の問題を解決してくださる唯一のお方、イエス様がおられるのです。イエス様は私の鉄の鎖、罪の負い目から解放してくださるために、十字架の上で犠牲となって死なれたのです。イエス・キリストが犠牲となつていのちを捨ててくださったがゆえに、私たちの罪の負い目は贖われ、赦されました。イエス様こそは、私の債務の鎖を取り除くことができる唯一のお方です。

イエス様によって「私の罪が赦されている」という確信をいただいて初めて、人は「神への債務」から解放されます。それは人生における最大の「解放」

です。そして人生の終焉に当たり、「イエス様を信じ、罪赦された確信」を持って死んで行くのか、そうでなくて「イエス様を拒否して罪の中で死を迎え、永遠の滅びに向う」のかが明らかになります。万一、罪の問題をそのままにして死を迎えるとすれば、それは何と恐ろしいことでしょうか。

私の友人の中には、自分はいい人間であり、悪いことはせず、生涯正しかったと信じている人々がいます。しかし、人間は死の瞬間に、自分の人生のすべてを携えて神の御前に引き出されていくことに気づきます。そこにはその人が苦勞して築きあげてきた地位も財産も、業績も成果も、何一つ持つていくことはできません。何も持たず、ただその人の罪の債務だけを持って、神の御前に引き出されるのです。これが人間の死だという事を知りさえすれば、あなたは、「何と恐ろしいことだ。私は今すぐ罪の問題を解決しなければならない」と思われるでしょう。

しかしもし、あなたがイエス・キリストを知り、信じれば、あなたは永遠の滅びから救い出されるのです。イエス様はあなたの罪を赦してくださいる唯一のお方です。しかもその罪からの解放の手段は、今、既に神によって目の前に用意され、あなたの前に差し出されているのです。

私はまだ若い十八歳の時に、戦争の体験を通して「罪の赦しとは何か」を知り、神への債務の重い鎖から解き放たれることができました。次の歌にある通りです。

「罪は赦された」。これこそ私たちが真に生きていくためのみことばだ。苦しんでいるたましいのために、イエス様は十字架について、いのちを捨てられた。イエス様の御名によって、私たちは救われている」

どうか、あなたご自身もこのことを体験してください。今すぐイエス様のところに行ってください。イエス様は、あなたが来られるのを待っていておられます。



す。そしてイエス様に心の奥を打ち明けてください。「主よ、私の人生は間違いだらけでした。神様の御前で罪の負い目に満ちていました。私はこのことを隠して、人前ではいいことだけしか言ってきました。私のでした。私のあなたへの債務を、今あなたの御前に包み隠さず差し出します。あなたの十字架の血潮が、私の罪の負い目をすべて帳消しにしてくださいることを信じます」と。

イエス様の罪の赦しとは、何とすばらしい恵みでしょう。十七世紀のイギリスに、ジョン・バニヤンという人がいました。彼はその信仰のゆえに長年投獄されていましたが、彼は牢獄の中で、現代も愛読されているすばらしい本を記しました。その本の中で彼は、キリスト者の人生を、非常に危険で冒険に満ちた歩みとして描いています。その本は次のように始まっています。

「この世」という町に、ある人が住んでいました

が、突然彼は心から突き動かされて叫びました。「ここは何かがおかしい。私には平安がない。私は不幸せだ。ここから出なければならぬ」と。彼は妻に話しましたが、こう言われました。「あなたは心が疲れているのです。休養しては？」と。しかしくら休んでも何も変わらず、心のざわめきは残りしました。そしてある日、彼は何の解決も見い出せないこの町を出なければならぬ、と気づいたのです。

そこで彼は町から逃げ出して放浪の旅に出ましたが、その途中で自分が背中に大きな重荷を背負っていることに気がつきました。その重荷は下ろすことができず、歩けば歩くほど重くのしかかってきました。これまで彼はこの重荷を背負うことを当然に思っている、その重さを感じてはいなかったのです。しかし「この世」という町から離れてみると、その重荷はますます大きくなっていきました。彼は苦しみがら山の小道をたどっていましたが、ある曲がり角

を前にして、もはや一歩も歩けなくなりました。その時、彼の目の前に、十字架が浮かんだのです。彼は意識を失って十字架の前に崩れ落ち、十字架にしがみついてそれを見上げたのです。その瞬間、彼の重荷が解け、音を立てて断崖絶壁に落ちていくのを感じました。

これこそ、イエス・キリストの十字架の下で人が何を体験できるかを表している、実にすばらしい情景です。そこで彼は次のように書いています。

「神の霊の導きによって十字架を見上げた時、私は小羊が私のために血を流され、十字架の上で死なれたことの意味を知った。その時、私は二つの奇蹟を見たのだ。イエス・キリストの大きな愛の奇蹟と、私の大きな罪の贖いとを」

私たちの罪の赦しは、イエス様が私の代わりに債務を支払ってくださったことによって成し遂げられました。私の債務の鎖は解かれ、そして私の重荷は

取り除かれたのです。イエス様だけが、私たちに罪の赦しを与えることができるお方です。

ここまで私たちは、何のためにイエス様が必要なのかを考えてきました。次に、なぜ私がイエス様を信じるのか、その理由をお話ししましょう。

主イエス様は、良き羊飼い

あなたはこれまで生きてこられて、人間がいかに孤独で、人生がいかに空しいかを、身にしみて実感されたことでしょうか。そしてその時、「私には何か欠けている。それは何だろうか？」と考え込まれた経験をお持ちではないでしょうか。そのような方に、是非、私はお伝えしたいのです。あなたには、「生けるまことの神、救い主が欠けています。そのお方こそ、イエス・キリストです」と。

先ほどから述べているように、イエス様は私たち

の罪の負い目、神への債務を贖うために、十字架につき、いのちを捨ててくださいました。

彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

(イザヤ 53:5)

イエス様は十字架の上でいのちを捨てられた後、岩を掘って作った墓の中に納められました。墓の入口は重い岩で塞がれ、番兵たちが見張っていました。安息日の次の日に、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来ました。すると大きな地震が起こって、主の使いが天から降りて来たのです。

それ(大きな地震が起こったのは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。その顔は、いわずまのように輝き、その

衣は雪のように白かった。番兵たちは御使いを見て恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。

(マタイ 28:2-4)

また、ヨハネの福音書には、この時の状況が次のように書き記されています。

さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。…「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。…イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ(すなわち、先生)。」とイエスに言った。

(ヨハネ 20:1、13-14、16)

私たちも同じように、イエス様を必要としています。名前を呼びかけてくださるお方を必要としています。私自身も人生のある時、真つ暗な深い淵に投げ込まれたことがあります。私はイエス様を信じているということ、ナチの刑務所に投げ込まれたのです。

私はこの刑務所で恐ろしい体験をしました。強制収容所に送り込まれる人々が大勢運ばれて来たのです。彼らは重罪人と多くのユダヤ人でした。彼らはこれから送り込まれる強制収容所で何が行なわれるのかを予感していました。ある土曜日の夜、刑務所の独房には絶望が満ち、皆がわめき叫びながら壁やドアを猛烈な音を立てて叩き始めました。不安になった看守たちは、ピストルを天井に向けて威嚇発射し、走り回って騒いでいる人々を殴りました。私は独房の中で震えていました。

しかし私はすぐに、「イエス様がおられる」ということに気がつきました。私は小さな声で独房の中

でこう言い続けました。「イエス様、イエス様、イエス様」。数分後、急にあたりは静かになりました。私はイエス様を呼び求めましたが、刑務所の中の誰一人として私が祈っていることを知りませんでした。ただ私の祈りは、イエス様だけに聞こえたのです。

刑務所では厳しく禁止されましたが、私は大声で歌い始めました。「イエス様は私の喜び。私の楽しみ。イエス様は私の誇り。ああ、いつまでですか。私の心は恐れています。私はあなたを求めています」と。

囚人たちは皆、聞いていました。看守たちも一言も発しませんでした。そこで私はさらに大声で歌い続けたのでした。「雷鳴の轟きに、全世界が震え上がろうとも、私のそばにはイエス様がおられる」

この時ほど私は、生ける救い主を持っていることの深い意味を強く感じたことはありませんでした。

既に述べてきた通り、私たちは誰もが必ず一度は

大きな苦しみ、「死」を通らなければなりません。

私は時々、次のように非難されます。「あなたは、いつも死のことを語って、私たちを脅かします」。

それで私は言います。「死について、特にあなたを脅かしているわけではありません。私たちは皆、本当は心の底で死を恐れているでしょう?」と。だから、死んでいく時に、イエス様がともにいてくださるということは、たとえようのない慰めであり、平安なのです。

またある人は、次のように言いました。「現代人は、死ぬことよりも生きることの恐れを持っているのではないでしょうか。生きることは、死ぬことよりももっと恐ろしいことではないでしょうか?」と。まさにその通りです。だからこそ、イエス様が必要なのです。イエス様を信じれば、その苦しい人生のすべての間、また死後も、救い主、慰め主、信頼できる主を持つことができるのです。

私は今までにいろいろな所で次の話をしてきましたが、あなたのためにもう一度話しましょう。それは実際にあった話です。

かつてエッセンという町で、実業界のある名士と知り合いました。彼は、「あなたが子供たちに信仰の話をしてくださるのは、とてもいいことだと思えますよ。失礼だがこの百マルクをお仕事のために使ってください」と言いました。そこで私は質問しました。「あなたご自身はいかがですか?」。すると彼は答えました。「いやいや、私は既に自分の世界観をしっかりと持っていますからね」。彼は大変いい方でしたが、神からは遠く離れていたのです。

さて、このことがあってからしばらくして、私は結婚式の司式をするようになりました。新郎新婦のために参列した方々は十数名で、大きくてがらんとした教会はやや寂しい雰囲気漂っていました。そしてかつてエッセンで知り合ったあの名士がこの式

の媒酌人でした。彼は優雅な燕尾服を着て、シルクハットを手にとっていましたが、教会の中でどういう態度を取るべきか分からずに戸惑っていました。ここでひざまずくべきなのか、十字を切るべきなのか、何が正しいのか、と自問しているようでした。そこで私は彼の気持ちをくつろがせるために、シルクハットを受け取って横に置いてあげました。やがて参加者が聖歌を歌い始めました。彼は聖歌など歌ったことがなかったのでしょうか。皆と一しょに歌っている素振りをしていました。

そこで、不思議なことが起こりました。突然、数十人の少女たちの歌声が会堂に響きわたったのです。新婦は子供礼拝の助手を勤めていたので、子供たちが賛美をしてくれたのでした。その歌はよく知られている子供の歌で、かわいい声をそろえて、皆が一生懸命歌いました。「私たちはイエス様の子羊だから、子羊だから。いつも喜んでいます。私たちの良

い牧者のことを」

その名士は歌声を聞くと、突然その場に屈みこんでしまいました。「具合でも悪くなったのだろうか」と私は思いました。彼は手で顔を覆って震えていました。「医者と呼ばなくちゃ」と思った瞬間、私は彼が泣いていることに気がつきました。子供たちはなおも歌い続けていました。「私の良い牧者は、私に良くしてくださいます。彼は私を愛し、私のことを知っておられます。私の名を呼んでくださいます。彼のやさしい杖のもとに、私は身を置きます。私には甘い牧草のある牧場があるのです」

実業界の名士は、そこに座りこんで泣いていました。その時、私はこのがらんとした教会で一体何が起きたのかを悟りました。彼の心の中に、一瞬にして「子供たちは私が持っていないものを持っている。つまり『良い牧者』を。しかし、私は孤独で失われた男なのだ」という思いが浮かんだのです。

あなたもこの子供たちと同じように、「私はイエス・キリストの群れに属しており、良い牧者を持っていることを喜びとします」と心から言えるようになれば、どんなに素晴らしいことでしょう。

私がなぜイエス様を信じるかと言うと、「イエス様が私の良い牧者であり、私の友であり、また、私をまことのいのちに救い出してくださったお方」だからです。なぜ私たちにはイエス様が必要なのでしょう。最後にもう一つお話ししましょう。

いのちの君であるイエス様

数年前ボエーマーヴァルトで開かれた修養会に出席した後、私は迎えの車を待って翌日までそこに残りました。参加者が帰ってしまい泊まる所がなくなつたので、その昔王侯が持っていた狩猟用の城に一泊しました。そこに住んでいるのは、一人の森林監視

神と共に歩む人生



員だけでした。その城の半分は壊れかけていて、電気もありませんでしたが、大きな居間には暖炉が燃えていました。監視員は私に石油ランプを渡して「おやすみなさい」と言いました。外はものすごい嵐でした。家の周囲のみの木には豪雨が降り注いで、まるでサスペンス映画のようでした。私は本を持ってこなかったのも、暖炉の上に置いてある小冊子を手を取って、薄暗い石油ランプの灯で読み始めました。ところがこの小冊子には、驚くようなひどいことが書かれていたのです。そこには「ある医者の、死に対する怒り」がぶちまけられていたのです。要約すると、「ああ、死よ。人類の宿敵よ。私は患者の延命のために寝食を忘れて頑張る。やっとその人が峠を越えたと思った時に、お前は嘲るかのようにベッドの背後から攻撃を仕掛け、それまでのすべての努力を水泡に帰させてしまう。私は病人を直すために必死だが、お前はその努力をすべて台無しにし

てくれるのだ。死よ、お前はいかさま師だ。敵だ」という内容でした。

その記事からは、死に対する憎しみしか読み取ることができませんでした。そして最後には絶望的な文字が綴られていました。「死よ。お前は終止符であり、感嘆符だ。せめてお前が感嘆符だけであればまだましなのに、私がお前を見つめる時、お前は疑問符に変身する。そして私は自問する。死は一体終わりなのか？それとも終わりではないのか？後に何が続くのか？死よ、お前は意地の悪い疑問符だ」

医学に従事する者として日々死に直面していると、そう言いたくもなるのでしょう。しかし、それは死の一面に過ぎません。そして私が声を大にして言いたいのは「死ですべてが終わるのではない」ということです。すべてを知られるイエス様は言われます。

わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを

信じる者は、死んでも生きるのです。

(ヨハネ 11:25)

滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいつて行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

(マタイ 7:13、14)

イエス様は十字架につき、よみがえられたことによつて、私たちにまことのいのち、永遠のいのちをくださいました。私は、救い主であるイエス様を信じていることを何よりの喜びとしています。イエス様は「いのち」そのものであられ、私たちを、まことのいのちへと導いてくださるお方です。ですから私は、イエス様を宣べ伝えたいのです。

第一次世界大戦中のこと、ヴェルダンという町で激しい戦いが行なわれました。至るところに屍が転

がっていました。戦場に立ち込めていた屍臭を、私は一生涯、自分の鼻の記憶から、脳裏から消し去ることはできません。「ここに、祖国のために戦った人々が眠る」と刻まれた戦争記念碑を見るたびに、私にはヴェルダンの戦場の酷い臭いがよみがえってきます。そして、あと百年もたてば、私たち自身もこの地上に生きていないと思うと、その恐ろしい死の匂いがまざまざとよみがえってくるのです。あなたはそれを感じないでしょうか？

しかし、この死の世界において、ただ一人死からよみがえった方がおられます。そしてそのお方イエス様は、私たちに次のように呼びかけておられるのです。

「わたしは生きており、あなたがたも生きるべきです。わたしを信じ、わたしのところに来なさい。わたしに立ち返りなさい。わたしのものとなりなさい。わたしはあなた方を、まことのいのちに導きます」

この呼びかけこそが、私たちの希望であり、永遠

のいのちに至る道です。暗く望みのない死に至るこの世界にあって、このように呼びかけてくださるお方、救い主イエス様なしに私たちはどのように生きていくことができるでしょうか。

最近、私はカール・ハイム教授が書き写したある古い手紙を読みました。それは第二次世界大戦のさなかにロシアで戦死した一人のクリスチャン兵士の手紙です。

「私たちの周囲の状況は惨憺たるものだ。ロシア軍がロケット砲で攻撃を始めると、皆がパニックに陥る。ただでさえ、吹雪、厳寒、飢えと凍傷という悲惨な状況なのに。でも、私には恐れはない。たとえ私が戦死したとしても、その先には素晴らしいことが待っているからだ。その時、私は栄光への第一歩を踏み出すのだ。その時私は、神である主と顔を合わせて出会う。そして主の栄光の輝きが私を取り囲む。だから私はここで死ぬことになってもか

まわらない」。この手紙を書いた兵士は、その後戦死しました。しかし、その手紙を読んだ時、私は、「イエス様を知っていれば、若者であっても死への恐れはなくなる。それは、何と素晴らしいことだろう」と思わずにはいられませんでした。

そうです。イエス様はいのちの君です。そして、イエス様のものとされた人々には、確固とした「永遠のいのちの希望」が与えられるのです。

ある時、ライプツヒの市庁舎で、市側の責任者と教会の幹部の会議が開かれていました。長々と演説が続きましたが、その内容はお互いの立場を尊重して当たり障りのない無難なものばかりでした。その会議の終わりに、ドイツ福音教団の事務総長のハインリッヒ・ギーセン氏が立って挨拶をしました。それは、実に忘れがたい挨拶でした。「皆様。私たちはどういふ人間の集まりでしょうか。もし尋ねられればどう答えればいいでしょうか。一言でいうと、

私たちは次のように祈る者の集まりです。『愛する神様。私が天国に入ることができますように、あなたを信じる者にして下さい』」

そう言い終わると彼は席に戻りました。そして参会者の間に、感動が広がって行きました。

三十年戦争の時に、パウル・デアハートは次のような詩を書きました。

「私はこの世の人生を歩んでいるが、この地上の幕屋に留まろうとは思わない。私は、天の故郷に至る私の道を歩んでいる。そこでは私の父なる神が、私を限りなく慰めてくださる」

あなたご自身もこのようにこの世を歩めることを私は心から願うものです。なぜイエス様が必要なのでしょう？すべてはあなたご自身がイエス様を知ることにかかっているのです。

